

保育者養成における保育内容「表現」の
授業に関する一研究 (3)
——指導方法の見直しによる学習効果——

菅沼 邦子

(2011年10月11日 受理)

Investigation of classroom instruction for “expression” in nursery school
teacher training: The results of improved classroom instruction
and the issues to be further examined

Kuniko SUGANUMA

Abstract

At a nursery teacher training institute, the teachers need to develop classroom instruction with the image of teachers wanted in the actual childcare setting in mind and in such ways that the students can effectively acquire desirable knowledge and skills for a preschool teacher. The present paper reports the improvements that have been made in this academic year for the “expression” classes, based on the results of the investigation that has been undertaken since 2009 as well as the issues that have come out of it. It also aims to examine how classroom instruction could be further improved in the future. The main improvements in these classes are that various ideas have been incorporated taking into account the number of students actively involved and that report writing for presentation has been strengthened. Through these efforts, the students have become able to expand the range of their expression, although there remain some problems to be addressed in report writing.

1. はじめに

保育者養成校において教師は、保育現場で求められる保育者像を視野に入れながら、学生が保育者として身につけることが望ましいと思われるさまざまな技能や知識を、効果的かつ効率的に習得できる授業を展開しなければならない。決して十分とはいえない授業数の中で、現場ですぐに応用できる保育の技術と、保育者としての資質にかかわる幅広い知識、感性などを育

てるためには、一授業内でこれらをバランス良く構成すること、また他の授業との連携を考慮した授業計画が重要である。

本稿では、「保育内容（表現Ⅲ）」（以下、「表現Ⅲ」と記す）の授業について、2009年度から取り組んだ授業研究を踏まえ、今年度見直した指導方法について報告し、今後のよりよい授業のあり方について検討することを目的とする。

2. 過去2年間の実践と課題

保育者養成における保育内容表現の授業改善の先行研究として、宇佐美、神原（2008）は、改善のポイントを、①概念化された学生の感性を解放する、②幼児の表現の芽ばえを見出す、③幼児の遊びをシュミレーションしてみる、の3点を挙げている。この取り組みは、目先の保育技術に陥りやすい授業形態から一線を画するものである。子どもであった経験は、誰もが持つものであるが、子どもの瑞々しい感性や表現を再現することは容易ではない。それを「幼児の遊びをシュミレーションする」という形で、大人でありながら、子どもの世界に浸り、その感覚を呼び起こす体験は重要である。

筆者は、保育内容の領域「表現」を深く理解するためには、人間にとって表現することの意味を考えることが重要だと考えている。子どもの表現を考える前に、まず学習者自身が豊かな表現者であることが大事なのではないか。そこで本学では、「表現Ⅰ、Ⅱ」で保育技術、実践力を身につけることを主に学び、「表現Ⅲ」では、自分自身を「表現する者としての存在」と意識させる授業を計画している。ここで、過去2年間の実践を振り返り、そこから見えてきた課題について述べたい。

本校において「表現Ⅲ」の授業は、2009年度以来、3年前期に設定されている。2009年度は、「保育者自身の表現力の向上」を第一のねらいとし、リトミックを取り入れた授業内容を展開し、その効果について検証を行った（菅沼、2009）。アンケートにより、学生がリトミックによって表現する楽しさを体験し、表現力の向上を感じることができたこと、また、これらの経験は、子どもの表現を受容することや子どもと表現する楽しさを共有することと結びついていると感じたということがわかった。

2010年度は、同じくリトミックを取り入れたが、題材ごとに学習の成果としてまとめた創作作品を「発表する」ことに焦点をあて、「発表する」ことによる学習の成果について検証した（菅沼、2010）。まず、発表作品を作る過程で、人との関わりを通してさまざまなコミュニケーションの機会を得ることができ、また、物事を客観的にみる視点を持つことができた。とりわけ学習者間でなく、学習者以外の人に見せることを前提に創作することで、学生は作品の質を

高めようとするために、表現能力が高まり、ひいては表現技術の向上につながるということがわかった。このことは、受講する学生の取り組み、態度や最終授業での振り返り、学内での授業評価アンケートなどから検証することができた。

過去2年間の当該授業では、保育者としての資質、主に感性にかかわる部分について、音楽を媒体とし、リトミックの手法によって取り組みを行ってきた。最終的には、オープンキャンパスの場、すなわち授業者間外に見せる発表を目的としたグループでの作品づくりをとおして、保育にも役立つさまざまな技術を習得すること、またグループ間で物作りをするためのさまざまな経験によって、人間関係を構築する上で必要な能力を身につけることができたのではないかと考えている。

このような過去2年間の当該授業、また筆者が担当するそのほかの授業を振り返り、浮かび上がってきた問題点、気づきについて述べる。

一点目は、表現の意味についての認識を深めることである。保育内容における「表現」の位置付けを再確認し、自己表出、自己解放に終止することなく、学習の終わりに、「子どもとの関わりの中での“表現”を理解すること」に結び付ける必要がある事。

二点目は、記録についてである。「発表」によって発表者にとってある一定の学習効果が見られたことは前述のとおりである。しかし発表者と鑑賞者で相互の学びがあれば、さらに学習効果が期待できるのではないか。鑑賞者がただ発表を見るのではなく、発表者に感想を伝えることを前提に、さらには見る観点を明確にすれば、鑑賞の能力も培うことができると考えられる。今年度はこのことを踏まえ、鑑賞記録を取るなどいくつかの試みを行ったが、あまりうまく機能しなかった。この点については今後さらに検討する必要がある。

三点目は、表現、創作に当たっては、活動する人数に留意することが学習効果を高める要因になるのではないかということである。グループで何か活動をする場合、活動に対し受身になってしまう学生がいることは好ましくない。たとえ大人数であっても、それぞれ自分の役割をしっかりと認識すること、すべての学生が主体的に活動に参加するためには、活動の人数を段階的に増やしていくなど、学習の効果を高めるには、緻密な計画が必要となると考えた。

本論文では、主に三点目の「活動する人数」に留意し、指導方法を見直した点について報告する。

3. 授業の概要

これまでの「表現Ⅲ」の授業の経過をふまえ、今年度の授業を次のように計画した。シラバスに示した授業の目的、計画は以下のとおりである。

[シラバス]

授業の目的 子どもの豊かな感性や表現を育むためには、保育者自身が豊かな感性、表現力を持っていなければならない。表現Ⅲの授業では、幼稚園教育要領、保育所保育指針における「表現」の意味を理解した上で、学習者の豊かな感性、表現を向上させるためのスキルを、リトミックを基礎とした方法により習得することを目的とする。

授業の計画

- 第1回目：授業の目的、内容、計画の説明
- 第2回目：表現活動の意味／課題発表「自己紹介の歌」
- 第3回目：リトミック①身体表現を中心に
- 第4回目：リトミック②声・ことばの表現を中心に
- 第5回目：リトミック③歌唱表現を中心に
- 第6回目：リトミック④音楽の要素について
- 第7回目：リトミック⑤音と動きの関係について
- 第8回目：リトミック⑥コレグラフィー
- 第9回目：グループによる表現作品、企画、構成
- 第10回目：グループによる表現作品、創作①
- 第11回目：グループによる表現作品、創作②
- 第12回目：グループによる表現作品、創作③
- 第13回目：グループによる表現作品、創作④
- 第14回目：発表
- 第15回目：まとめ、振り返り

シラバスに記したとおり、半期15回（実質16～17回）の授業を大きく2つに分け、前半8回を担当教師主導とした授業、後半7回を学生が主体となって行う発表作品づくりとした。この方法は授業回数数の多少の違いはあるが、過去2年間とほぼ同様である。

4. 指導方法の見直しを図った活動内容と考察

ここでは、今年度、指導方法の見直しを図った第2回から第8回のうち第6回目を除く7回の授業について、具体的な活動内容を報告し、考察を述べる。

保育の現場では、さまざまな状況、場面に応じて、子どもとの間で、1対1、1対複数人など、また保育者間においてもさまざまな人数で保育に携わる場面が想定される。このことからこの授業では、表現活動する人数を1人→2人→3～5人の小グループ→10人前後のグループと、段階的に大人数の表現形態へ移行するかたちをとり、さまざまな人数形態で活動を行うことを試みた。指導者の観察、記録、学生の発言、記述式アンケートによって考察を行った。

◇第2回

「自己紹介の歌」

活動する人数 = 1人

〔活動内容〕 第1回目の授業で出された課題、一人1分程度の「自己紹介の歌」の発表

〔考察〕 ただ歌うだけでなく、身振りをつけたり、紙芝居仕立てにしたりするなど、表現方法が工夫されてとても興味深い発表であった。授業、実習、弾き歌いチェックなど1、2年時に、人前で、一人で発表する機会が多くあったためか、躊躇したり、極度に緊張したりすることなく、のびのびと個性を発揮していた。

アンケート結果では、授業で行った内容で一番おもしろかったとの回答がでている。「一人ひとりの個性がたくさん歌に詰まっていた」「みんなの意外な一面に気づくことができた」などの記述から、うたを通した他者理解の一歩として受け止められていることがうかがえた。また「自分がどこまで作れるのかという力だめしにもなった」「自分で自分のことを歌にしたことはなく、悩んで作ったが、聴いてもらって笑ってもらえて、やってよかったと思った」などの記述から、一人で創作することの大変さ、また自分の表現に対する反応、評価の大切さに気付いているということがわかった。

一人での活動、発表は、作ること、周りの評価がすべて自分一人にかかってくる。そのことによって、責任感ややり遂げた時の満足度も大きい。このような経験は貴重であるとともに、保育の場面では、一人ひとりの子どもの個性をみつめることや、子どもの気持ちに沿うことにつながる経験であったといえるのではないだろうか。また、それぞれの個性を発表によって他者に伝えられたことは、のちのグループ活動を行う際に有効的であったと言える。

◇第3回

「リトミック① 身体表現を中心に」

活動する人数 = 2人

〔活動内容〕 ここでは、身体表現を中心に活動した。まず、2人組になり、向かい合わせに立ち、鏡のように、2人が同時に動くという活動を行った。

次に2人のCMを作るという課題を出した。発表時間は30秒、ことばを使わず、身体表現のみで行うことを条件とした。方法は、まず二人の共通する事柄を3つ挙げ、その中から1～3つを表現すること。また、他者に見せることを想定した作品づくりに留意することを条件とした。

〔考察〕 はじめの活動のねらいは、相手を感じることである。動きを同化することによって、主に視覚を使って相手を認識し、さらに息を合わせる、動きを予測するなど、コミュニケーション能力を高めることをねらいとした。

鏡のように、先導する動き手がどちらかわからないように動くためには、二人の動きがずれないように、動き方や動く速さに留意することや、相手の動きを予測することが求められる。ことばを使うことなく、伝え、受け止めることは、子どもとの関係性において、重要なスキルである。「先に動くほうが好き」「真似をするほうが好き」「相手の動きを真似することで、自分では考え付かない動きやしたことのない動きができておもしろい」などの発言から、2人での活動の効果が読み取れた。

2人のCMの課題は、ことばを使わない身体の動きのみの表現に限定した。前回の自己紹介を2人で行うことで、表現の幅を広げることと、他人に見せることを条件にしたことで、発表方法を工夫（人に伝えることの工夫）する力を身につけることを意図とした。2人の共通点を見つけるために、お互いの趣味や、好きなことを話し合うことで、伝えるだけでなく、聞くことの経験をとおして、最少人数でのコミュニケーションをとる訓練の第一歩とした。作る過程では、相談する時間、話すことに多くの時間を費やしている傾向にあった。相手の話を聞く、自分の考えを伝える一つの手段としては有効だが、1つ目の活動のねらいを活かしきれていないこと、動きがことばの当て振りのように終始してしまったことに関して改善が求められる。

◇第4回

「リトミック② 声・ことばの表現を中心に」

活動する人数 = 5～6人

〔内容〕 導入として、いろいろな声で“あ”を表現することを行った。一人ずつ自分の“あ”を探し、その声を身体の動きとともに表現した。次に絵本「おならうた」（谷川俊太郎、飯川

和好作)をことばのリズムによって朗読し、おならの音の部分は声と身体の動きで表現する活動を行った。5～6人で構成された7グループで、1ページごとにリレーしながら1冊を一つの商品として表現した。最後に5～6人のグループで、自分の名前を使った作品作りを行った。

[考察] 声、ことばの表現については、からだ、こころとの密接な関係性の中で、演劇や療法などの分野においてもさまざまな試みがなされてきた(竹内, 1988, 波瀬, 1986)。ここでの“あ”のエクササイズでは、こころの解放や感情表現ではなく、声による“あ”を音として捉え、音の高さ、大きさ、ニュアンス、長さなど、音の要素を的確に目に見えるように表現することをねらいとした。しかし学生の声やそれに伴う身体の動きには、感情表現を含んだものが多かった。やはり声と感情を切り分けて考えることは困難であることがわかったと同時に、このエクササイズは顔の表情を含む豊かな表現能力を伸ばすことが可能であると実感した。

次に絵本を用いた声の表現についてであるが、絵本は学生にとって身近な教材であったことや、谷川のユーモラスなリズム感あふれる詩と飯川の非常にインパクトのある画風によって描かれたおならの描写は、非常にイメージしやすかったと思われる。「音を体で表現するというのがおもしろかった」という記述から、今まで無意識下でやっていたことを意識的に音を動きで表現すること、視覚化することの面白さを感じたことがわかる。また、「グループでやった時は、誰かが面白い案を出したら、また誰かがそれを越す面白い案を出してくるので最終的にすごく良いものになる」との記述からは、グループ活動の効果が読み取れる。5～6人という人数は、一人ひとりが意見を出しやすく、このような活動に適していると思われた。

◇第5回

「リトミック③ 歌唱表現を中心に」

活動する人数=14～15人

[内容] 西アフリカのフォークソングである“Tina Singu”3部合唱(輪唱)曲を使って、3グループ(1グループ14～15人)で、身体表現をともなった合唱(輪唱含む)をする。導入として、簡単なリズムパターンをクラップやステップ、身体の動きで表現し、リトミック的なアプローチによりリズムの理解を促した。また、楽曲を使い、曲の構成を理解し、パートごとに、特にリズムパターンに着目し、“リズムが目に見えるように表現すること”に留意させ、グループで動きをつけながらうたい、最終的に合唱にした。

[考察] 1クラス約45人を3つのグループに分けた1グループの人数が14～15人である。この人数で活動する場合には、一人ひとりの意見を一つひとつ取り上げるのではなく、いろいろなアイデアを出し合うとともに、一つを選び、あるいは融合させ、より良いものを作り出すコーディネーターが必要となる。アイデアを出す、進行する、調整するなどグループの中での自分

の役割を見極めながら行動する能力が問われるが、ここではこれらが円滑に行われていた。事前にリズムの学習を丁寧に行ったことがその要因として挙げられる。最終的にグループで考えたものを、合唱として一つに合わせた。「動きをつけたので迫力があって楽しかった」「みんなで歌うのがとても気持ちがよかった」「響きのよさを味わった」などの記述により、大人数で表現することの醍醐味を味わうことができたと思われる。

◇第7回 「リトミック⑤ 音と動きの関係について」

活動する人数＝全員約40名／7～8人

[内容] 代表的なリズムアンサンブル作品のうち、ことばによるアンサンブル「野菜の気持ち」（古谷哲也 作曲）とボディーパーカッション作品「Rock Trop」（W. シンステイン 作曲）を題材に、大人数によるアンサンブルを行った。

[考察] 「野菜の気持ち」では、既製の曲を全員で演奏することを活動のメインとした。複数人でも、ことばがはっきりと伝わるよう、息をそろえること、発声に留意することを指導上のねらいとした。「やさいの名前を言っているだけなのに、リズムの組み合わせが音楽になって面白かった」「みんなで合せた時の独特な世界を味わうことができた」「真剣にやるとその分笑いが出て、楽しくできた」などの意見から、楽曲の面白さを味わえたことや、演奏の完成度により、面白さの質が向上し、活動に対する満足度、達成感が上がることを経験することができていることがうかがえる。

「Rock Trap」では、楽器を使わずに、声や身体から発せられるさまざまな音を探求することから始め、曲の譜読みに加えて、間に小グループ（7～8人）による8小節のボディーパーカッションによるリズムアンサンブルの創作を課した。リズムアンサンブルの創作は、単にリズムパターンを考えるのではなく、ボディーパーカッションによる音探し、音選び、またパフォーマンスの要素も含む難易度の高い課題であった。7～8人という人数であったが、活動に対し受け身の学生はおらず、積極的に、また主体的に活動に取り組む様子が見られた。意見を出し合い、試し、改善するといった行動がスムーズに行われている様子がうかがえた。「みんなで意見を出し合い、たくさんの音が発見できた」「意外な発想が出て面白かった」などの記述から主体的に活動できたこと、グループ内で他者評価が円滑に行われている様子がうかがえた。

◇第8回 「リトミック⑥ コレグラフィー」10人

[内容] スイスの作曲家、演奏家である O. ROGG によるピアノ連弾曲“ROGGREGGAE”を用いたコレグラフィーを行う。まず、曲を聴き、一人ひとりが曲の特徴を線によって紙に描く。描かれたデザインから主たる3つのモチーフを発見すること、全体から曲想の変化を発見し、

曲の構成を理解することを目的とした。それを手がかりに10～11人のグループでコレグラフィーを行った。それぞれのモチーフを身体の動きによってどう表すか、音のダイナミクス、構成によってどのような人数配分をしたらよいかなど、曲を視覚化し、人に伝えるためのポイントについてアドバイスした。

[考察] 作品としての完成度はあまり高くなかった。その要因としては、課題に対して活動時間が十分でなかったこと。音を的確に身体の動きで表現することが、コレグラフィーの経験の浅い学生には難しかったことなどが挙げられる。10～11人という人数もこの課題の中で一人ひとりが役割を持って機能するには、多すぎたように思われた。ダンス経験などがあり、動きのポキャプラーが豊富な学生が先導して、他の学生を動かすというような場面が多く、指示を待つだけの学生もみられた。「グループで作ることは難しい」との意見も多くみられた。一方で「曲調を捉え、どんな音があるのか、身体のどの部分を使えば表現できるか…とても頭を使った」「私の音楽のレベルが少し上がったのではないかと思う」「グループや個など、いろいろな表現の方法を考えることができた」などの記述から、音楽表現について深く考えようとする様子や、見せ方を工夫しようとする様子が見え、授業後半の、オープンキャンパスに向けた作品作りに生かせる気づきがあった。

5. お わ り に

本稿では、「保育内容（表現Ⅲ）」の授業について、過去2年間の授業実践を振り返り、そこから見出された課題、指導計画の問題点を挙げ、それらをふまえて見直しを行った授業方法について報告し、検討を加えた。活動人数に焦点を当て、段階的に人数を増やしていく方法によって、大人数の中でも一人ひとりが自分の役割を担って、主体的に取り組む姿勢が見受けられ、一定の成果があったのではないかとと思われる。なにより経験したことのない課題に真摯に取り組む、表現することで、自分や他人の個性に気づき、認め、グループの中での自分の役割について考える経験を得られたのではないだろうか。

授業の中で、学生が表情豊かに、全身で生き生きと表現する姿を何度となく見ることが出来た。表現方法は未熟であっても、一生懸命取り組む姿はなんと美しいものだろう。このような姿が保育の現場で発揮できることを願い、今後さらに、残された課題や新たな問題点の見直し、他の授業との連携を含めた授業改善に取り組みたい。

参 考 文 献

- 宇佐美明子 神原雅之 (2008) 「保育者養成における「保育内容表現」の授業改善」『国立音楽大学紀要42』
- 菅沼邦子 (2009) 「保育者養成における保育内容「表現」の授業に関する一研究」『広島女学院大学論集第59集』
- 菅沼邦子 (2010) 「保育者養成における保育内容「表現」の授業に関する一研究 (2)」『広島女学院大学論集第60集』
- 竹内敏晴 (1988) 『ことばが劈かれるとき』ちくま文庫
- 谷川俊太郎 + 波瀬満子 (1986) 『あたしのあ あなたのア』太郎次郎社
- 谷川俊太郎 原詩 飯野和好 絵 (2006) 『おならうた』絵本館